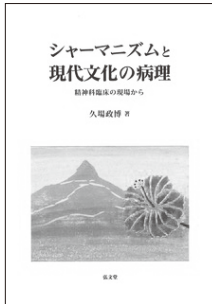


■ 書 評



シャーマニズムと現代文化
の病理
—精神科臨床の現場から—

久場政博 著
弘文堂

2017年3月 256頁
本体価格 4,000円+税

本書のタイトルで目に飛び込んでくるシャーマニズムという言葉は、「アイヌ民族のツス」「青森弘前のイタコ」「沖縄のユタ」などで知られるシャーマン（巫女や祈祷師）の能力により成立している宗教や宗教現象の総称であり、宗教学、民俗学、文化人類学などで用いられる概念である。そして、精神医学領域では、憑依状態がまず連想され、憑依妄想がみられる統合失調症をはじめ意識の変容の観点から心因反応、非定型精神病、解離性障害の病名が思い浮かぶ。本書は、憑依の精神病理、与那国の文化と精神病理、八重山の文化と精神病理の3部、全11章から構成されている。著者が昭和43年から昭和55年ごろまでに、奥能登や金沢など北陸にある7病院や八重山諸島石垣島に勤務していた時の臨床経験を基に、憑依状態を呈した自験例を提示し、さまざまな角度からシャーマニズムと文化との関連について検討をしている。

症例をふんだんに織り交ぜ、憑依状態を呈する患者を診察する機会のない読者にも理解しやすい工夫がなされている。昭和40年代の八重山における精神科医療の揺籃期を詳細に描写しており、精神史としても興味深い。レトロ感覚で懐かしいが、平成になってからの症例がないのは残念であり、そのあたりを踏まえて読み進んでいくことが必要であろう。

第1章ではわが国の憑依状態の研究を紹介しているが、それによると明治時代から憑依に関しての書物は出版されていた。評者の所属する大学の

初代精神科教授である森田正馬が1915年の本誌で「余の所謂祈祷性精神症に就て」発表している。それでもなお、憑依現象を神がかりやアミニズムなどの神道や宗教的産物にとらえ続けていた。1950年代以降から憑依状態に関する論文数が増え精神科領域でも注目されるようになった。その中で、憑依状態は現代文化とシャーマン文化の接点において成立すると考え、同一性が揺らがねば出現しないことを述べている。第2章で奥能登と金沢における地域研究から、宗教との関係に着目し、日本の文化には、神道が在来仏教を受け入れる雑種併存性と自然との調和を好む素地がありシャーマン文化が根付きやすいことを指摘している。科学の進歩で今まで神や霊的なものと考えられていた現象が解明されてきたため、迷信的な考えは衰退の一途である。しかし、臨死体験、虫の知らせなどの現代の科学をもっても説明できない現象が未だ残存し、人間は科学を超えた超自然現象に回帰することもある。

八重山諸島では、人頭税から貧しい人たちが糸満売りにだされ、マラリアをはじめとする疫病などにさらされたという暗い過去がある。その一方で精神病様症状をスータマガリの予兆ととらえ、周囲から崇拜、畏怖の念をもって大切にされたことで、この地方の精神障害のとらえ方は非常に狭く、憑依現象は社会の中で受け入れられていた。

遺伝学、生物化学的アプローチで精神障害の解明が進み、現代では精神障害は脳の病気であると考えられ、社会の枠組みにはまらないと外に押し出されてしまう。現代文明により息絶え絶えとしたシャーマン文化の現状とオーバーラップする。

脳科学を背景としたエビデンスに基づく精神科診療に疲れを感じ、一休みしたくなった時に、本書を手にとってみていただければ、シャーマンではないかといわれている卑弥呼の時代へと誘ってくれるであろう。今まで見過ごされていた何かが見えるかもしれません。

(忽滑谷和孝)